

Where Angels Fear to Tread にみられる E.M. Forster の主題と文体

真 田 時 蔵

小説というものを人間の経験、特に、さまざまな人間関係のなかで個々の人間がもつ体験を描きだすのに最もふさわしい文学形式とみなすことには異論はないであろう。小説家の人生経験のとらえ方は様々であり、その人生経験を完璧に表現することはもとより不可能である。人生経験と虚構との間には当然越えがたい溝があるからである。その溝を縮める小説家の技が小説の可能性の限界を決定づけるのである。その小説家の技が最も鮮明に表われるのが文体である。E.M. Forster の小説の魅力は、まずその文体にあるといえるだろう。フォースター独自の文体によって、登場人物の心理の微妙なゆらめきが、鮮やかにすくいとられているからである。そこに読者はフォースターの作家としての誠実さとともに、現代性を読みとることができる。つまり、フォースターの関心は、もっぱら現代における人生の機微を精妙な筆致で記録することであった。そこにはまた、知性はそなわってはいるが、人間としての真のありようをしかと捉えていない人間がうごめくこの時代の相を理解するための視点も呈示されている。したがって彼は人生の悲惨を表現することも躊躇していないのである。Arnold Kettle も「E.M.フォースターはロレンスやジョイスに匹敵する作家とはいえないが、すぐれた永続的な芸術家であって、現存するイギリスの小説家のうち、最も高く、最も幅広い標準に照らしても真剣に論ずべき作家の一人である」⁽¹⁾と評している。それはフォースターがイギリスのすぐれた小説の伝統を継承した作家であるからである。つまり、フィールディング、オースティン、ディケンズといったすぐれた小説家と相通じ合う文学認識をもっていた。ヴァージニア・ウルフが *Mr. Bennett and Mr. Brown* の中でフォースターをエドワード朝の作家達に反抗して書いた小説家の一人としてウルフ自身やロレンス、ジョイスの仲間に加えている。⁽²⁾このことは注目すべきことだが、Walter Allen も指摘しているように異論がないわけではない。⁽³⁾少なく

とも小説技法の面では、フォースターは伝統的な技法を受け継いでいる。Lionel Trilling はフォースターが技法の面で影響をうけた作家として、フィールディング、ディケンズ、メレディス、ジェイムズの名をあげているが、⁽⁴⁾オースティンをあげていないのは片手落ちであろう。オースティンは自分の小説を喜劇的叙事詩（‘a comic Epic-Poem in Prose’⁽⁵⁾）と呼んだフィールディングに始まるイギリス小説の伝統を守った小説家であるばかりでなく、F.R.Leavis が指摘する通り「オースティンの伝統に対する関係は創造的なものであった。彼女は後に続く者のために伝統を創っただけでなく、彼女のなしとげた仕事はわれわれにとって週及的効果を持ったのである。彼女を通して過去を振り返ってみる時、われわれは彼女に先行したもののの中に、それは彼女のおかげなのだが、さまざま可能性や意義が発掘されているのを見出し、跡付けてみると彼女にまでつながっている伝統を彼女が創り出したのだということに気付く。」⁽⁶⁾フォースターは彼の *Aspects of the Novel* を一読すればわかる通り、オースティンの衣鉢を継ぐ作家なのである。

では、フォースターの小説の主題に対する姿勢はどのようなものであったろうか。彼の主題的関心はイギリスの中産階級に向けられていた。

「伝統に沿った小説家」⁽⁷⁾ともいわれたこともあるフォースターは、基本的には不可知論者であったが、社会における人間の見せかけと人間の実相、想像力の欠如と偽善、つまり「未発達的心情」⁽⁸⁾の諸相がフォースターの中心主題なのである。*Two Cheers for Democracy* (1951) に収録されている‘What I believe’の中で、‘I do not believe in Belief . . . My motto is: “Lord, I disbelieve — help thou my unbelief.”’⁽⁹⁾と書いたフォースターにとって救済の探求も重要なことであった。信仰を持ち得なかった彼は、人間と人間の望ましい関係を模索することとなった。そのために人間の实相の認識を不可欠とした。それは彼の *The Longest Journey* (1907) で善悪一体の認識 (the knowledge of good-and-evil)⁽¹⁰⁾と呼ぶところの認識であろう。そしてそれは *A Passage to India* (1924) ではムア夫人が耳にするマラバールの洞窟でのこだまの描写にも反映している。

“Pathos, piety, courage—they exist, but are identical, and so

is filth. Everything exists, nothing has value.” If one had spoken vileness in that place, or quoted lofty poetry, the comment would have been the same—“ou-boum.”⁽¹¹⁾

このこだまは、人間の実在のありようを暗示している。したがってフォースターは人間の、特にインテリ特有の観念的思考の不毛性を揶揄するのである。彼の文体から伝わってくる声調は、彼独自のものであるが、フィールディング、オースティンと受け継がれてきた伝統である喜劇的、melodramatic な様相を帯びている。上述の観点から、この小論ではフォースターの主題、技法が集約的にみられる *Where Angels Fear to Tread* (1905) を考察してみたい。

Where Angels Fear to Tread では、「未発達的心情」の主題が、二つの異った生活様式——イギリスとイタリアにおいて——を背景に展開される。二つの生活の様式の衝突が典型的に取り扱われ、心——フォースターにとっては神聖ではあるが、不可知のもの——の秘密とまではいわなくとも、感受性のゆらめきを浮彫にすることを通して、フォースターの小説に一貫してあらわれる主題が探究されている。この小説ではプロットの構成も明確で、フォースターの小説家としての基本姿勢がよくうかがわれるので、その後の作品を理解するうえでも、重要な手がかりとなる作品である。⁽¹²⁾ Walter Allen は「フォースターにとってプロットは、彼の作中人物たちが耐え抜かねばならない障害競争のようなものであり、彼らはプロットによってつぎつぎと試され正体をあばかれるのである」と述べているが、正鵠を得た言葉である。⁽¹³⁾ したがって、*Where Angels Fear to Tread* のプロットの展開は melodramatic である。⁽¹⁴⁾ そして文体から伝わってくる語調は ironic である。⁽¹⁵⁾ そこにはフォースターの知性の豊かさや洗練された諷刺の精神がうかがわれるが、これはオースティンから受け継いだものである。それはもちろんフォースターが諷刺による批評能力に恵まれていたことによるものであるが、「小説家の任務は秘められた人生をその根源において顕示すること」⁽¹⁶⁾ とする彼の小説理論ともかかわることである。ひいては彼の人生観、芸術観ともかかわるのである。Allen Wilde は先にふれたように、*Where Angels Fear to Tread* のプロットを melodramatic であると述べたあと、つぎのよう

に述べている。

Melodrama, by its sudden high-lighting of event, by its emphasis on the shocking, by its apparent disregard of the laws of cause and effect, provides a structural counterpart to what may be called Forster's philosophy of the great moment. If life is, as Forster seems to say in his tales and in his novels, essentially dull and, for most people at most times, meaningless, then it can derive significance only when some sudden burst of color illumines its gray surface.⁽¹⁷⁾

人生が本質的に dull で meaningless であるとすれば、人生が意義深い様相をみせるのは束の間のことである。人生は芸術ではないからである。人生において意味ありげに振る舞う愚かさをフォースターはウィットとユーモアをもって描くのである。この小説の題名 *Where Angels Fear to Tread* は言うまでもなく Alexander Pope の *An Essay on Criticism* にある次の詩句に由来している。

For Fools rush in where Angels fear to tread.⁽¹⁸⁾

この小説を読めばこの詩句が暗示するような人生の様相が描かれていることがわかる。「滑稽は何よりも社会に対する人間の或る特殊な不適應を表示するものである。」⁽¹⁹⁾ *Where Angels Fear to Tread* では、ヘリトン一家によって代表されるイギリスの中産階級の人々の愚かしい振る舞いが暴露される。彼らは Sawston⁽²⁰⁾に住む。Sawston に対して Monteriano というイタリアにある小さな町が、対照的に設定されている。そしてこの二つの町で象徴される二つの生活様式が対置される。Ann Margaret Ridler が指摘する通り、「われわれ読者はソーストン einen 一つの場所として意識することはほとんどなくて、むしろ観念として意識される。つまりフォースターにとってそれは、ヴィクトリア女王の亡くなった直後の時期のイギリス上層中産階級にみられる狭量で品性卑しく、俗物的で、反文化的なすべてのもの象徴である。」⁽²¹⁾

フォースターの小説の主題の一つは「旅路」であるという指摘を John Sayre Martin が行っているが、⁽²²⁾ *Where Angels Fear to Tread* は、Mrs. Herriton の今はなき息子チャールズの嫁 Lilia の旅立ちの場面から始まる。Lilia と彼女より10才若い chaperone として Lilia に同行する Caroline Abbatt を見送る Mrs. Herriton, 娘の Harriet, 息子の Philip はソーストンの価値観に囚われている。Lilia のイタリアへの旅立ちも、Lilia と牧師補の Kingcroft とのこまった噂を打ち消すため、つまり家名を傷つけず一家の respectability を保つために計画されたのである。この「旅立ち」の主題は Lilia と Caroline にとって精神的な「旅立ち」の意味をもつ。一家の respectability を維持することに腐心し、そのためには偽善を偽善と自覚することなく行い、Lilia に対して抑圧的なヘリトン家から解放された Lilia の様子が先ずこの小説の冒頭のところで描かれている。

They were all at Charing Cross to see Lilia off—Philip, Harriet, Irma, Mrs. Herriton herself. Even Mrs. Theobald, squired by Mr. Kingcroft, had braved the journey from Yorkshire to bid her only daughter good-bye. Miss Abbott was likewise attended by numerous relatives, and the sight of so many people talking at once and saying such different things caused Lilia to break into ungovernable peals of laughter.

“Quite an ovation,” she cried, sprawling out of her first-class carriage. “They’ll take us for royalty. Oh, Mr. Kingcroft, get us foot-warmers.”

The good-natured young man hurried away, and Philip, taking his place, flooded her with a final stream of advice and injunctions—where to stop, how to learn Italian, when to use mosquito-nets, what pictures to look at. “Remember,” he concluded, “that it is only by going off the track that you get to know the country.”⁽²³⁾

こうした描写にはオースティンを彷彿させる筆致を感じとることがで

きる。つまり人間に見られる勿体ぶった見せかけ、てらい、愚かさをフォースターはオースティンと同様鋭く見抜くことができたし、どんなに辛辣なことを言ってもユーモアがあり、そのユーモアは平衡のとれた観察と常識に基づいていることがうかがわれるのである。人物創造についてもオースティンの影響は大きい。フォースターはオースティンの人物創造にふれて、...her characters though smaller than his (i.e. Dickens's) are more highly organized.⁽²⁴⁾と述べているが、この言葉はそのままフォースターの人物創造にも当てはまる。一見フォースターの言う flat character のように思われがちな Lilia の性格創造も 'Lilia must be pushed through life without bringing discredit on the family into which she had married.'⁽²⁵⁾と書かれているが、単純化されてはいない。Lilia はロマンティックな想いにひきずられて、12才年下の Gino と衝動的に結婚をしてしまう。これは "Love and understand the Italians, for the people are more marvellous than the land."⁽²⁶⁾という Philip の言葉をほとんど鵜呑みにした結果でもある。Mrs. Herriton にとっては予期せぬことであった。 "... no one could live three months with Caroline Abbott and not be the better for it."⁽²⁷⁾と Mrs. Herriton は Lilia のイタリア旅行に同行する Caroline に期待をかけていたのである。Lilia のソーストンでの生活を作者はつぎのように述べている。

Lilia would not settle down in her place among Sawston matrons. She was a bad housekeeper, always in the throes of some domestic crisis, which Mrs. Herriton, who kept her servants for years, had to step across and adjust. She let Irma stop away from school for insufficient reasons, and she allowed her to wear rings. She learnt to bicycle, for the purpose of waking the place up, and coasted down the High Street one Sunday evening, falling off at the the turn by the church.⁽²⁸⁾

Gino と結婚したのちも Lilia はモンテリアーノでの生活習慣になじもうとはしない。Lilia はソーストンの因襲からののがれたが、ソーストンの価値観をぬぐいきれてはいない。Lilia 自身は自覚してはいないが

自分の財力によって夫 Gino と周囲の人々を支配しようとするのである。Mrs. Herriton と Lilia の違いの一つは、Mrs. Herriton は上品さを装って極めて意図的に人を牛耳ろうとすることである。文化的な違いなど考えたこともない Lilia は、女性に対する差別的なモンテリアーノの生活習慣に驚くことになる。

Italy is such a delightful place to live in if you happen to be a man. There one may enjoy that exquisite luxury of Socialism — that true Socialism which is based not on equality of income or character, but on the equality of manners. In the democracy of the *caffè* or the street the great question of our life has been solved, and the brotherhood of man is a reality. But it is accomplished at the expense of the sisterhood of women.⁽²⁹⁾

Gino が財産目当てに Lilia と結婚したことがわかり、さらに Gino の背信に気づいたとき Lilia は‘ . . . even if she had the courage to break away, there was no one who would receive her now.’⁽³⁰⁾であること、そして ‘She did not hate him, even as she had never loved him . . .’⁽³¹⁾ という状態におこまれる。Philip からイタリア賛美の話をきかされ、若い Gino に初めて会った時のロマンティックな雰囲気を目が眩んで結婚したのであれば当然の結果である。Lilia は自分の心のうちにつむぎだした幻想にまどわされ、現実を正しく認識できない愚かしい人間なのである。Philip もイタリアで経験するように ‘Romance only dies with life.’⁽³²⁾ という事実は、フォースターの小説のなかで一貫してみられる「未発達的心情」(undeveloped heart)⁽³³⁾ という主題と結びついている。この「未発達的心情」という主題の展開は、Philip に最もよくみられる。

Philip, whose one physical advantage was his height, felt annoyed at her (i.e. Miss Abbott) implied indifference to it.⁽³⁴⁾

He was a tall, weakly-built young man, whose clothes had to be judiciously padded on the shoulder in order to make him pass muster. His face was plain rather than not, and there was a

curious mixture in it of good and bad.⁽³⁵⁾

At all events he had got a sense of beauty and a sense of humour, two most desirable gifts. The sense of beauty developed first.⁽³⁶⁾

このように描かれている Philip は、Lilia にイタリアとイタリア人を賛美する気持ちを吹きこむが、彼自身がモンテリアーノでイタリアの現実に触れた時、幻滅を味うのである。さらに母親 Mrs. Herriton のもとで育った Philip は、Lilia の結婚相手が歯医者の子だと知って仰天する。

Philip gave a cry of personal disgust and pain. He shuddered all over, and edged away from his companion. A dentist! A dentist at Monteriano. A dentist in fairyland⁽³⁷⁾

すぐれた知性をもちながら、心情的に未発達な Philip は母親の指示通りに Gino に対して、'If you grant my request you will earn our thanks — and you will not be without a reward for your disappointment.'⁽³⁸⁾ と言って手切れ金による事態の解決をはかろうとする。Philip が幼児性を最も端的に露呈しているのは、Gino が Philip の申し出を受けて、既に Lilia と結婚している事を Philip に告げた時、笑いをこらえられず、はずみで Philip を押し倒してしまう場面であろう。フォースターは小説の描写のなかで象徴的瞬間⁽³⁹⁾を呈示することを得意とするが、この場面はそうした象徴的意味をもつものである。Philip が Gino に1000リラ提供すると言い、Gino の表情に一瞬貪欲さが浮かび、いんぎんさ、愚かさ、ずるさが浮かぶところなどは、喜劇的な効果がある。ベルグソンが「喜劇がドラマよりも一層ずっと現実生活に近い……」⁽⁴⁰⁾と述べている通り、この喜劇的描写は、それだけ人間の実相に迫っているといえよう。

I am actually what my age and my upbringing have made me

— a bourgeois who adheres to the British constitution, adheres to it rather than supports it, and the fact that this isn't dignified doesn't worry me. I do care about the past. I do care about the preservation and the extension of freedom.⁽⁴¹⁾

これはフォースターが *Liberty in England* のなかで語った言葉であるが、いかにもフォースターらしさが出ている。こうした誠実なフォースターの姿勢を Philip 像と重ねあわせてみると、自分で確信のもてる生き方に固執するフォースター自身の自画像を戯画的に描いているように感じられる。Arnold Kettle も「……フォースターはずばぬけて分別のある常識人であるから、その人間関係を現実のコンテクストから抽象したりできるはずがない」⁽⁴²⁾と述べているように、フォースターの作家としての誠実さが、Philip を描く時に自分自身の投映となってあらわれているように思われる。⁽⁴³⁾ Philip が人間的に成長するきっかけになったのは、母親の不誠実さに気づいた時であった。

Philip started and shuddered. He saw that his mother was not sincere. Her insincerity to others had amused him, but it was disheartening when used against himself.

.....
In one moment an impenetrable barrier had been erected between them. They were no longer in smiling confidence.⁽⁴⁴⁾

母親の本当の姿に気づいた Philip について作者は「... though she was frightening him, she did not inspire him with reverence. Her life, he saw, was without meaning.⁽⁴⁵⁾」と説明している。それまで母親を信頼し、母親に依存した生活を余儀なくされていた Philip は母親を一人の人間として見るようになるのである。母親の人生が無意味だと実感することによって Philip の精神的な旅立ちが始まったといえるだろう。⁽⁴⁶⁾ したがって Gino についても「He's much more honest with himself than I am...」⁽⁴⁷⁾と言えるようになる。Mrs. Herriton からみれば Gino は—— Philip にとってもそのように思われたのだが——卑俗性 (vulgarity)

に染っていて respectability をもたないことになるが、実は Mrs. Herriton 自身が卑俗そのものであるということになるのである。母親の卑俗性によっていわば麻痺状態におちっていた頃の Philip は Mrs. Caroline Abbott を見る目が違っていた。だが、Harriet が盗み出した Gino の子供を死なせてしまったあと、Philip が死児を抱き Gino の家に行き Gino に激しく責められ扼殺されかけたとき Caroline に助けられる。その後の Philip の変貌はつぎのように書かれている。

All through the day Miss Abbott had seemed to Philip like a goddess, and more than ever did seem so now.

.....

There came to him an earnest desire to be good through the example of this good woman. He would try henceforward to be worthy of the things she had revealed. . . . He was saved.⁽⁴⁸⁾

それまで母親のあやつり人形⁽⁴⁹⁾であった Philip は、卑俗性に染っていない Caroline によって 'Life was greater than he had supposed . . .'⁽⁵⁰⁾ と悟るのである。Philip は22才でイタリアで遊び、そこでイタリアの美しさにふれ、一つの審美的な体系を身につけ、美への愛よりも、人間愛や真理愛が人生にとって重要なことを知らなかったのである。⁽⁵¹⁾

Caroline もまたイタリアによって人間的変貌をとげるが、それは Philip の場合と全く違った経過をたどる。

She was good, quiet, dull, and amiable, and young only because she was twenty-three: there was nothing in her appearance or manner to suggest the fire of youth. All her life had been spent at Sawston with a dull and amiable father, and her pleasant, pallid face, bent on some respectable charity, was a familiar object of the Sawston streets.⁽⁵²⁾

ソーストンでの生活しか知らなかった Caroline は Mrs. Herriton の期待を担って Lilia とイタリアへ赴いたことは先に述べたが、Lilia の結婚、そして Lilia の死に対する後悔から、Lilia の子供の養育を自分で引

きうける決意でモンテリアーノを再訪する。そして Gino の子供に対する父性愛にふれていわば開眼する。Philip に向かって 'You are so splendid, Mr. Herriton, that I can't bear to see you wasted. I can't bear —she has not been good to you mother.'⁽⁵³⁾ と言うとき、Caroline は Mrs. Herriton とは異った人間に変っているのである。それはすでに 'In the spring she had sinned through ignorance . . . '⁽⁵⁴⁾であったことを自覚し、'she was not ignorant now.'⁽⁵⁵⁾であるとわかるからである。つまりそれは彼女自身が ' . . . Sawston was different: we had to keep up appearances.'⁽⁵⁶⁾ と言っているように、人間として自律的に考え、人間的事であることとは何んであるかを探究する姿勢を失っていないからである。

Caroline Abbott, Lilia's in Italy, is both more intelligent and more inhibited than Lilia; at the beginning of the novel, at least, she is an orthodox representative of Sawston's belief in decorum. But Monteriano and Gino in particular eventually succeed in evoking a Caroline who was quite unknown in Sawston. Even at the outset she fails in her mission to save Lilia from being seduced by Italy, for she secretly shares Lilia's desire for freedom. As the novel progresses Caroline is both increasingly reminded of her commitment to Sawston morality and increasingly attracted to Gino as a man. The crucial moment in her internal debate is her realization, in watching Gino bathing his child, that he is the very image of an ideal father. "The horrible truth, that wicked people are capable of love, stood naked before her, and her moral being was abashed." Caroline herself falls in love with Gino, not in the genteel way that might be condoned in Sawston but "because he's handsome, that's been enough."⁽⁵⁷⁾

これは Frederic C. Crews の Caroline についての解釈であるが、要を得ていると思われる。Caroline は Philip 同様救済を経験するのである。Rex Warner が指摘するように「救済されるためには単に心情なり頭脳なりにしたがうだけでは充分ではないのである。」⁽⁵⁸⁾ そのことはつぎの

Caroline の言葉に明確に示されている。

If he had asked me, I might have given myself body and soul. That would have been the end of my rescue party. But all through he took me for a superior being —— a goddess. I who was worshipping every inch of him, and every word he spoke. And that saved me.”⁽⁵⁹⁾

フォースターにとって *Where Angels Fear to Tread* における最も大きな主題は、救済の主題であった。救済とはフォースターにとっては人間として生きること目覚めることであった。それは偏狭であったり、卑俗であることを止め、反文化的な価値観を拒否できる感性を身につけることを意味していた。そうした感性をもつ人間の交わりを彼は重視する。それに比べると恋愛は、かりそめの現象であって「暖かな太陽とか、冷たい水というような単なる肉体的瑣末事にすぎない」。⁽⁶⁰⁾ そのような感性と無縁の人物は Mrs. Herriton と夫人の娘 Harriet である。先に述べた通りイタリアと対照的なイギリスの上層中産階級が示す文化を象徴する人物である。Mrs. Herriton は恐るべき圧制者である。偽善的なみせかけのうちに卑劣さを隠蔽している。Lilia の再婚を阻止しようとするときだけでなく、Lilia の死後彼女の子供を引きとろうとするときにも Gino に金を提供することで処理しようとする。ともかく Mrs. Herriton の行為は常に動機は不純なのである。

Mrs. Herriton's policy only appeared gradually. It was to prevent Miss Abbott interfering with the child at all costs, and if possible to prevent her at a small cost. Pride was the only solid element in her disposition. She could not bear to seem less charitable than others.⁽⁶¹⁾

彼女は客観的に自分自身を判断しようとする能力に欠け、現実から自分を守ろうとする人間である。そして自分の生活信条を絶対視し、周囲の人間をそれに従わせようとする。彼女はフォースターが最も嫌悪する

偏狭で想像力の乏しい人間である。この種の人物はフォースターの他の小説にも登場する。*Howards Ends* の Charles Wilcox はその典型的な人物である。*A Passage to India* の Ronny Heaslop にもその類縁性をみとめることができる。いかほど愚鈍であろうと、いかほど想像力が欠如していようと自分の未発達的心情を発達させようとする人間にはフォースターは同情もついているが、Mrs. Herriton に対してはフォースターの嘲弄が感じとれる。第一章の末尾では、読者に戦慄を覚えさせるほどに Mrs. Herriton を痛烈に揶揄し、戯画的に描いている。ここにはまたフォースターのこの小説の文体が特徴がよく表われている。

Just as she was going upstairs she remembered that she never covered up those peas. It upset her more than anything and again and again she struck the banisters with vexation. Late as it was, she got a lantern from the toolshed and went down the garden to rake the earth over them. The sparrows had taken every one. But countless fragments of the letter remained, disfiguring the tidy ground.⁽⁶²⁾

Mrs. Herriton が子供に及ぼす影響はきまって悪いものであるが、⁽⁶³⁾ Philip は先に述べたように母親の不誠実さに気づき、真の人間愛を理解できるように成長していく。しかし娘の Harriet は母親と同様、自己認識を深めることもできず自己欺瞞的な世界に閉じこもっている人間である。

Harriet's education had been almost too successful. As Philip once said, she had 'bolted all the cardinal virtues and couldn't digest them.' Though pious and patriotic, and a great moral asset for the house, she lacked that pliancy and tact which her mother so much valued, and had expected her to pick up for herself.⁽⁶⁴⁾

「ハリエットの教育はほとんど申し分なく行き過ぎた」というくだけ

は、この母親と娘についての極めて辛辣な叙述といえよう。小説手法的には作者が喜劇的展開のために極端に単純化した戯画像を Harriet にみることもできるが、彼女は上層中産階級の醜さを一身に体現したような人物である。つまり狭量、頑迷、信仰をしばしば口にしながら酷薄である。想像力の欠如、精神の貧困ということでは Mrs. Herriton 以上といえる。Mrs. Herriton と共にソーストンの生活様式そのものを象徴する人物である。その意味では Harriet は *Where Angels Fear to Tread* のなかでは重要な人物なのであるが、Laurence Brander も Norman Kelvin⁽⁶⁵⁾ もそして J.B. Beer も彼女に特別に注目していないのは意外である。Lionel Trilling は Harriet と Gino を比較して ‘...Gino may become temporarily a devil because he is a man; but Harriet is permanently a devil because she is not really a woman, ...Gino’s revltry is the result of passion, not of principle and will, and it passes.’⁽⁶⁶⁾ と述べているが、適切な批評といえよう。Harriet についての作者の叙述には Lilia にかかわる叙述よりも行きとどいているように思われる。例えば、Harriet が Gino のもとから子供を盗み出す直前、彼女が読んだ形跡のある祈禱書の内容を示す一節は暗示的である。

All that was left of her was the purple prayerbook which lay open on the bed. Philip took it up aimlessly, and saw— “Blessed be the Lord my God who teacheth my hands to war and my fingers to fight.”⁽⁶⁷⁾

Harriet がこどもを盗みだした動機は、Caroline が Lilia に対する罪の償いから子供を養育しようとする気持ちとは全く異なり、情緒的不感症を露呈している。Mrs. Herriton は体面を保つために金を提供して子供を引きとることができると思いきこんでいたが、Harriet は子供を盗み出すことを正当化している。したがって引用した場面でのフォースターの諷刺は辛辣である。Harriet が Philip と共に汽車でヴェローナからフィレンチェに向う場面での Harriet の描写が意味するところは明白である。

Then, as she was going through Mantua at four in the morning, Philip made her look out of the window because it was Virgil's birthplace, and a smut flew in her eye, and Harriet with a smut in her eye was notorious. At Bologna they stopped twenty-four hours to rest. It was a festa, and children blew bladder whistles night and day. "What a religion" said Harriet . . . Next day they crossed the Apennines with a train-sick child and a hot lady, who told them that never, never before had she sweated so profusely. "Foreigners are a filthy nation," said Harriet. "I don't care if there are tunnels; open the windows." He obeyed, and she got another smut in her eye.⁽⁶⁸⁾

二度までも Harriet の眼に石炭の煤が入ってしまうところは、単に喜劇性を高めるという効果以上の象徴的意味がある。彼女が精神的に盲目であるという暗示である。Harriet が象眼細工の手箱を Lilia に与えたのではなく、貸したのだと催促を繰り返さず場面の喜劇的效果も見逃せないだろう。そこでは与えることの喜びを知らない Harriet の心の貧しさが伝わってくる。Harriet がフォスターに決定的に揶揄されるのは、モンテリアーノの劇場の場面である。

The audience accompanied with tappings and drummings, swaying in the melody like corn in the wind. Harriet, though she did not care for music, knew how to listen to it. She uttered an acid "Shish"⁽⁶⁹⁾

このあと聴衆から投げつけられた花束を Lucia が拾いあげ投げ返したとき、Harriet の胸にまともに当る。ここでも人と気楽に打ちとけることのできない Harriet の性格が露呈される。劇場に来合わせていた Gino とその友達と打ちとけあうことのできる Philip とは対照的である。

Harriet と違って Caroline はイタリアへの旅によって大きく変貌をとげる人物である。

He(i.e. Philip)had known Miss Abbott for years, and had never had much opinion about her one way or the other. She was good, quiet, dull, and amiable, and young only because she was twenty-three: there was nothing in her appearance or manner to suggest the fire of youth.⁽⁷⁰⁾

最初 Philip は Caroline に若い女性としての魅力を見出すことはできなかったが、やがて Caroline は Philip の成長に大きな役割を果すことになる。先ず彼女には Mrs. Herriton にはみられない誠実さがあり、Harriet に備わっていない美点——たとえば自分を客観的に見つめる能力——がある。Frederick C. Crews は Caroline の変貌をつぎのように述べている。

... at the beginning of the novel, at least, she is an orthodox representative of Sawston's belief in decorum. But Monteriano and Gino in particular eventually succeed in evoking a Caroline who was quite unknown in Sawston. . . . she is forced by blossoming of her own nature to reject Sawston's pious convictions as to what is acceptable or objectionable. This is not to say, however, that she becomes free to live as she pleases. At best, she learns exactly what it is that she has excluded from her life; her return to Sawston at the end is a frank admission of the impossibility of fulfillment.⁽⁷¹⁾

Caroline については「この小説の結末で、フィリップの眼に映じた彼女の変貌についてさえ、それはフィリップが共鳴できると同じ程度に読者が納得して共鳴してくれるかどうか不明である」⁽⁷²⁾という見方もあるが、意見の分かれるところであろう。ともあれこの小説において彼女の存在が大きな意味をもつのは、彼女の誠実さである。

“The child came into the world through my negligence,”
replied Miss Abbott. “It is natural I should take an interest in

it.”

“My dear Caroline,” said Mrs.Harriton, “you must not brood over the thing. Let bygones be bygones. The child should worry you even less than it worries us. We never even mention it. It belongs to another world.”⁽⁷³⁾

Mrs. Herriton の Lilia の子供に対する態度が Caroline の態度と対照的であるだけに Philip にとっては、母親の不誠実さが際立って見えてくるのである。Mrs. Herriton にとっても、そして Harriet にも、Lilia の子供は生命をもった存在ではなく、自分達の体面を傷つけかねない危険なものなのである。二人はつぎにあげる Caroline のような感性に欠けた人間なのである。

She had thought so much about this baby, of its welfare, its soul, its morals, its probable defects. But, like most unmarried people, she had only thought of it as a word—just as the healthy man only thinks of the word death, not of death itself. The real thing, lying asleep on a dirty rug, disconcerted her. It did not stand for a principle any longer.⁽⁷⁴⁾

フォースターがイギリスでも、そしてイタリアにいるときも信仰を口にしながらも独善的な Harriet と人間的成長の可能性を秘めた Caroline を対照的に描くことによって読者に何を伝えようとしているかは明白である。⁽⁷⁵⁾

すでに述べたように、この小説には二つの文化の対照がみられるのだが、ソーストンの町の文化は Mrs. Herriton と Harriet に象徴的に表現され、イタリアのモンテリアーノのそれは、Gino によって表される。Mrs. Herriton と Harriet にとっては、この二つの文化は respectability と vulgarity の対照として理解されている。対置されたこの二つの文化に、小説の登場人物がさまざまな反応をみせるのだが、Wilfred Stone が“Ten years before the story commences, LiliaTheobald had married Charles Herriton, which is to say, in Herriton terms, that vul-

garity had married respectability.⁽⁷⁶⁾と指摘している Lilia の Gino との結婚に始まり、Philip, Caroline Harriet のイタリア旅行という展開を通して、それぞれの人間性が明らかになる。Philip がイタリアの文化に接することによって最も大きな変化をうけたといえよう。J.B. Beer はそのことをつぎのように要約している。

... his (i.e. Philip's) 'Italy' is an aesthetic idea which cannot survive the blasts of contact with real Italian life. Even the idea of a dentist in Monteriano is enough to blow his vision sky high. The course of the novel is for him a progress from aesthetic detachment to involvement with life.⁽⁷⁷⁾

Gino は Philip が観念的に理解していたイタリアとは異なるイタリアの現実を表象する人物である。また、Caroline にとっても 'Monteriano had become a magic city of vice, beneath whose towers no person could grow up happy or pure.'⁽⁷⁸⁾と想像されていたので、Gino を正しく理解することはできなかった。Philip がイタリアについて抱いていた幻想から覚めるのは、彼が Lilia, Gino, Caroline と夕食をとったときである。

The face of Signor Carella was twitching too much for Philip to study it. But he could see the hands, which were not particularly clean, and did not get cleaner by fidgeting amongst the shining slabs of hair. His starched cuffs were not clean either, and as for his suit, it had obviously been bought for the occasion as something really English—a gigantic check, which did not even fit. His handkerchief he had forgotten, but never missed it.

.....

And Philip had seen that face before in Italy a hundred times — seen it and loved it, for it was not merely beautiful, but had the charm which is the rightful heritage of all who are born on that soil.

But he did not want to see it opposite him at dinner. It was not the face of a gentleman.⁽⁷⁹⁾

この場面は Philip がイタリアへ発つた Lilia に向って「……イタリアはたんなる遺物と美術品の博物館だという、ばかげた観光目的で行ったりしてはいけません。イタリア人を愛し理解することです。なぜならイタリアの国民は国自体よりずっとすばらしいのですから」⁽⁸⁰⁾という言葉と響き合って喜劇的効果を高めている。このようなイタリアの生活様式の表徴である Gino は人生の傍観者⁽⁸¹⁾である Philip と人間を人間として扱うことを知らない Mrs. Herriton や Harriet は対照的な人物である。J.B. Beer もつぎのように述べている。

The moral struggle between Sawston and Italy is between society which thinks that people can be treated as business items and a community which makes many mistakes but never that one.⁽⁸²⁾

換言すれば、ソーストンを society という言葉で表すとすれば、イタリア、つまりモンテリアーノは real life という言葉で表すことができよう。⁽⁸³⁾したがってさまざまな矛盾をはらんだ real life を生きる人物として Gino が存在するのである。そして 'These people know how to live. They would sooner have a thing bad than not have it at all. That is why they have got to have so much that is good.'⁽⁸⁴⁾と評されるイタリア人の典型的人物が Gino なのである。Gino を vulgar という言葉だけで形容することはできないのである。作者フォースターが 'His one desire was to become the father of a man like himself, and it held him with a grip he only partially understood, for it was the first great desire, the first great passion of his life. Falling in love was a mere physical triviality . . .'⁽⁸⁵⁾と述べていることからわかる。

Lilia の子供 Irma は母親と別れて、Mrs. Herriton のもとで教育——ソーストンの因襲的生活になじむように——をうける筈であった。事実 Mrs. Herriton は母親からイタリアから戻ってこないうちに Irma の精

神形成をしてしまいたいと思っていた。しかし Lilia が Gino と結婚し、子供も生まれると、Irma はヘリントン家の人々の期待を裏切って、その事実を漏らしてしまう。しかも Irma はお祈りのなかで新しい弟と父親のために祈っていいかといって Mrs. Herriton と Harriet を困らせる。

“ . . . The other night she asked if she might include him in the pepole she mentions specially in her prayers.”

“What did you say”

“Of course I allowed her,” she replied coldly. “She has a right to mention any one she chooses. But I was annoyed with her this morning, and I fear that I showed it.”

“And what happened this morning”

“She asked if she could pray for her ‘new father’—— for the Italian⁽⁸⁶⁾

このあたりの諷刺的效果は透逸である。Philip と同様 Irma にも救済があることが予兆されている。

以上 *Where Angels Fear to Tread* にみられる主題と方法についてみてきたが、フォースターがこのあとの小説で一層明らかにしていく主題が *Where Angels Fear to Tread* に紛れもなくあらわれている。フォースターの主題についての態度にはまよいはない。筆致も明快である。⁽⁸⁷⁾ フォースターの倫理的立場も明確である。その意味でこの小説はフォースターの作品の原形的意味あいをもっている。「この小説には潜在的な主題の深さがあるにも拘らず、重量感が不足である」⁽⁸⁸⁾ という批判もあるが、フォースターは自伝的要素を織りこんだ *A Room with a View* を書きかけたのち中断し、*Where Angels Fear to Tread* を完成させた経緯からみて必ずしも当を得た批評とは思われない。つまり、フォースターがこの小説で意図したのは bildungsroman として構想し、彼の分身に近い Philip の精神的変貌を comic Epic-Poem in Prose として描くことにあった。L. Trilling もこの小説を ‘a novel of learning and growth, like *The Way of All Flesh* and *The Ambassadors*’⁽⁸⁹⁾ と述べているが、Wilfred Stone が更に踏みこんで Philip を ‘as a kind of experimental

self for Forster, a portrait of the artist as a young man exploring his own possibilities for experience,⁽⁹⁰⁾として見ようとしていることは示唆に富む解釈である。bildungsroman としての展開のなかで、フォースターは中心主題を一貫して明らかにしているのである。それは当時イギリス中産階級にみられた偏見や偽善から解放されて、人間が人間本来の感性を甦らせることであった。それはフォースターがケンブリッジ時代に古典学と歴史を専攻し、観念的な教養ではなく、広い視野から身につけた文化意識がはぐくんだものである。

〔注〕

1. Arnold Kettle, *An Introduction to the English Novel* (Hutchinson University Library, 1957), p.152.
2. Virginia Woolf, "Mr. Bennett and Mrs. Brown," *The Captain's Death Bed* (Hogarth Press, 1950), p.91.
3. Walter Allen, *The English Novel* (Pelican Books, 1958), P.333.
4. Lionel Trilling, *E.M. Forster* (A New Directions Paperbook, 1964), P.8.
5. Henry Fielding, *Joseph Andrews and Shamela* (Oxford University Press, 1991), p.4.
6. F.R. Leavis, *The Great Tradition* (Chatto Windus, 1962), p.5. 『偉大な伝統』(長岩寛・田中純蔵訳, 英潮社, 1972)の訳を使わせていただいた。
7. Rex Warner, *E.M. Forster* (Longman, Green Co., 1960), p.8.
8. E.M. Forster, "Notes on the English Character," *Abinger Harvest* (Edward Arnold, 1961), p.13.
9. E.M. Forster, "What I believe" *Two Cheers for Democracy* (Edward Arnold, 1972), p.65.
10. E.M. Forster, *The Longest Journey* (Edward Arnold, 1961), p.194.
11. E.M. Forster, *A Passage to India* (Edward Arnold, 1961), p.156.
12. See Alan Wilde, "The Aesthetic View of Life: *Where Angels Fear to Tread*", *Modern Fiction Studies* (Autumn 1961), p.207.
13. Walter Allen, *op. cit.*, p.336.
14. Alan Wilde, *op. cit.*, p.207.
15. Wilfred Stone, *The Cave and the Mountain: A Study of E.M.*

- Forster* (Stanford University Press, 1966), p.162.
16. *E.M. Forster, Aspects of the Novel* (Edward Arnold, 1953), p.45.
 17. Alan Wilde, *op. cit.*, p.207.
 18. Alexander Pope, *An Essay on Criticism*, l. 625.
 19. アンリ・ベルクソン『笑い』(林 達夫訳 岩波文庫), p.124.
 20. See J.B. Beer, *The Achievement of E.M. Forster* (Chatto & Windus, 1962), p.66. “. . . we see Sawston, the London suburb which is dismally representative of all London suburbs, drawn up in battle array against Italy.
 21. Ann Margaret Ridler, *Where Angels Fear to Tread* (英潮社, 1983), p.3.
 22. John Sayre Martin, *E.M. Forster, The Endless Journey* (Cambridge University Press), 1976.
 23. *Where Angels Fear to Tread*, p.7.
 24. *Aspects of the Novel*, p.72.
 25. *Where Angels Fear to Tread*, p.66.
 26. *Ibid.*, p.7.
 27. *Ibid.*, p.15.
 28. *Ibid.*, p.14.
 29. *Ibid.*, pp.54-55.
 30. *Ibid.*, pp.69-70.
 31. *Ibid.*, p.70.
 32. *Ibid.*, p.32.
 33. “Notes on the English Character”, p.13.
 34. *Where Angels Fear to Tread*, p.30.
 35. *Ibid.*, p.78.
 36. *Ibid.*
 37. *Where Angels Fear to Tread*, p.32.
 38. *Ibid.*, pp.44-45.
 39. See *The Longest Journey*, p.142.
 40. アンリ・ベルクソン 前掲書 p.126.
 41. E.M. Forster, “Liberty in England”, *Abinger Harvest* (Edward Arnold, 1961), p.79.
 42. Arnold Kettle, *op. cit.*, p.153.
 43. See Wilfred Stone, *op. cit.*, p.177.

44. *Where Angels Fear to Tread*, p.97.
45. *Ibid.*, p.98.
46. See Lionel Trilling, *op. cit.*, p.58.
47. *Where Angels Fear to Tread*, p.195.
48. *Ibid.*, p.192.
49. See *Ibid.*, p.98.
50. *Ibid.*, p.197.
51. See *Where Angels Fear to Tread*, p.79: "At twenty-two he went to Italy with some cousins, and there he absorbed into one aesthetic whole olive-trees, blue sky, frescoes, country inns, saints, peasants, mosaics, statues, beggars. He came back with the air of a prophet who would either remodel Sawston or reject it. All the energies and enthusiasms of a rather friendless life had passed into the championship of beauty."
52. *Where Angels Fear to Tread*, p.27.
53. *Ibid.*, p.168.
54. *Ibid.*, p.139.
55. *Ibid.*
56. *Ibid.*, p.120.
57. Frederick C. Crews, *E.M. Forster, The Perils of Humanism* (Princeton University Press, 1962). pp.74-5.
58. Rex Warner, *op. cit.*, p.9.
59. *Where Angels Fear to Tread*, p.204.
60. *Ibid.*, p.77.
61. *Ibid.*, pp.98-9.
62. *Ibid.*, p.25.
63. See Rex Warner, *op. cit.*, p.13.
64. *Where Angels Fear to Tread*, p.18.
65. Laurence Brander, *E.M. Forster, A Critical Study* (Rupert Hart-Davis, 1968), Norman Kelvin, *E.M. Forster* (Southern Illinois University Press, 1967)
66. Lionel Trilling, *op. cit.*, p.73.
67. *Where Angels Fear to Tread*, p.175.
68. *Ibid.*, p.107.
69. *Ibid.*, p.133.

70. *Ibid.*, p.27.
71. Frederick C. Crews, *op. cit.*, p.75.
72. Ann Margaret Ridler, *op. cit.*, p.6.
73. *Where Angels Fear to Tread*, pp.95-6.
74. *Ibid.*, p.145.
75. See Wilfred Stone, *op. cit.*, p.176: "In a technical sense, the story ends happily. The fools, Philip and Caroline, are morally victorious over the knaves, Harriet and Mrs. Herriton. But the crucial question of the book is, what is the nature of their victory?"
76. *Ibid.*, p.164.
77. J.B. Beer, *op. cit.*, pp.71-2.
78. *Where Angels Fear to Tread*, p.99.
79. *Ibid.*, pp.36-7.
80. *Ibid.*, p.7.
81. See *Ibid.*, p.201: ". . . you look life as a spectacle; you only find it funny or beautiful . . ."
82. J.B. Beer, *Ibid.*, pp.67-8.
83. See Alan Wilde, *op. cit.*, pp.209-10: "Exuberance and enjoyment and enjoyment and honesty of feelings — these are the hallmarks of the Italian who best represents these qualities is Gino Carella, who stands in the same relation to Italy that Mrs. Herriton does to England. Gino functions primarily as the human embodiment of Forster's primitive ideal; all of open-air Italy is his domain.
84. *Where Angels Fear to Tread*, p.127.
85. *Ibid.*, p.77.
86. *Ibid.*, p.91.
87. See Frederick C. Crews, *op. cit.*, p.73: "With the metaphysical background virtually eliminated, the social foreground can be rendered with an easy assurance of tone and a deft manipulation of comic adventure. Since the theme is now simple and clear, the reader's interest is drawn not to subtlety of meaning but to verbal and dramatic irony."
88. Ann Margaret Ridler, *ibid.*, p.12.
89. Lionel Trilling, *ibid.*, p.58.
90. Wilfred Stone, *ibid.* pp. 176-7.

E. M. Forster's Themes and Style in *Where Angels Fear to Tread*

Tokizo SANADA

E. M. Forster's *Where Angels Fear to Tread* is a mature work, though it is his first novel. The relative simplicity of its story makes it easy to explore his themes and style, for many of his essential qualities as a novelist are revealed clearly in it. A close look at *Where Angels Fear to Tread* reveals a relationship between his artistic proposition and style.

The present paper proposes to show how E. M. Forster's themes are meaningful through his characterization and style. His style is personal, though he owes much to Jane Austen. As with Austen, the tone is ironic. *Where Angels Fear to Tread* is a novel of learning and growth; that is, a bildungsroman. The characters who learn and grow in the book are Philip Herriton and Caroline Abbott. They are portrayed in the "round", the opposite of which is the "flat", which E. M. Forster discusses in his *Aspect of the Novel*. Although E. M. Forster said "Philip Herriton I modeled on Professor Dent," it might be possible to look upon Philip as a portrait of E. M. Forster himself as a young man exposing his propensities. Therefore the last phase of Philip's progress is revealing.

北星学園大学文学部 北星論集第31号 正誤表

頁・行目	誤	正
31頁23行目	Pp.91-107。 _____	放送大学教育振興会
95頁 5 行目	Abbatt	Abbott
101頁 4 行目	you mother	you_your mother
101頁11行目	Lilia's _____	Lilia's chaperone
109頁17行目	lift	life
143頁12行目	コミA	コミ研A
145頁グラフ2 カテゴリー 6	関連__	関連性
149頁グラフ3 カテゴリー 7	関連__	関連性
167頁 1 行目	non_belligerent	nonbelligerent
210頁 6 行目	on	of
210頁12行目	historlcal	historical